

出発、一教を出発した時の勇姿なし。マニラ到着、城内に入る。

数日後、一難去ってまた一難、アメリカ空軍のグラマン戦闘機、延三〇〇機、五〇〇機の大空襲あり。翼に星のマーク、パイロットの眼鏡、首には純白のマフラーをなびかせながら低空より機銃掃射、我、生きた心地なし。今でも眼に浮かぶなり。すでに比島は戦場なり爆撃により瀕死、重傷の軍馬約二〇〇頭、口きけぬ軍馬悲惨なり。涙こらえ射殺せるを目撃す。数日後、戦友ともどもシンガポールに向けマニラを出発す。

五隻の船団に駆潜艇二隻護衛にあたる。途中ボルネオ島沖で僚船一隻に魚雷命中、時刻は十四時ごろと思う。我らが乗船する本船は前方より波をけだてて突き進んで来る魚雷二発を交し、無事ボルネオ島ミリ港に停泊す。その後シンガポール、ジャワ島スラバス兵站に集結、暫らくして一教より速水、富田、寺山、早川、小川員、小川、松村の七人はスマトラ島パレンバン第十六野航第三分隊に転属、終戦。英国軍の指揮下に入り、ガララン島において捕虜生活、二十一年七月、広島県大竹港に上陸、

現在に至る。

初年兵の思い出より始まり、終戦までの概略を記述致しましたが、四十年前のことなので誤りがあると思いますが、お許しを願いますとともに、思い出を記述させて頂きました。

終始初年兵

山形県 富樫 大助

大東亜戦争に二年九ヶ月、初年兵として参加、思い出の一部しか表現できませんが、忘れてはいけない戦争体験を、拙い文章で綴ります。

戦争もたけなわの昭和十八年二月、関東軍に現役兵として入隊のため、新潟県松村部隊に集合、三週間ほどの教育を受けて、満州に向かつて出発。二月下旬に牡丹江の第四独立守備隊二十大隊三中隊に到着しました。そこで本格的に厳しい初年兵教育を受け、満鉄警備に配置されました。

しかし同年十一月、南方第二支隊編成要員として転属命令が出て、牡丹江を出発、朝鮮の釜山港より乗船したのが支隊員一九〇〇人。貨物船を改造した良洋丸、日蘭丸に分乗、駆逐艦に護衛されて航行、途中敵の潜水艦の攻撃と、十二月の太平洋のシケに船酔い多発、食事も喉を通らないなど苦労しながらも、無事に通過した。

この間、初年兵の悲しさ、寒い出港時には船倉の人口付近の寒い場所に寝かされ、徐々に暑い地域に進むと、船倉の奥の方の暑い場所に移されるなど、寒さと暑さに悩まされた航海でした。着衣も防寒衣から防暑衣へと替わり、出港十三日目に寄港したのが、南方諸島の要港トラック島でした。

そして最終目的地の東カロリン諸島のクサイエ島に上陸したのが、十九年一月三日でした。

寒い満州から赤道直下の南の島に転戦したのですが、珍しい風物を愛でる暇もなく、早速物資の荷揚げ、そして運搬作業。作業中は野宮でしたが、守備場所が決まると、自分たちの入る兵舎作り（カラオの木を伐採、これで骨組みを作り屋根と壁の部分はニッパ椰子の葉を編ん

だもの）。出来上がりは原始時代の住居そっくりでした。

上陸して最初に驚いたのは、無数のトカゲ（一〇センチから一五センチくらい）。作業中の休憩で足を伸ばしていると、人を恐れる気配もなく、チヨロチヨロと這い上がってくることでした。次にやられたのが Deng 熱。暑い南の日照りの場所で作業中に悪寒を感じ、衛生兵に申し出ると四〇度の熱、Deng 熱と診断され三日ほど高熱が続きました。

さて兵舎も出来上がり、守備の演習などやっているうちに、食糧事情が悪化、白米の食事が甘藷入りとなり、段々に甘藷の量が多くなり、副食も皆無になってきました。このころになると塹壕作りか甘藷作りが主な作業となってきました。予定されていた飛行場作りも中止され予定地が甘藷畑となる始末。

そのうち制空権海権がすっかり敵の手に落ち、物資補給の輸送船も途中沈められ、そのため非常用物資の補給に潜水艦が夜間に接岸するという情報が伝わってきました。多少食事が良くなるかと淡い望みで待ち受けていたら、その当日は朝から空襲が激しくなり、夜になると艦

砲射撃と照明弾が飛び交い、我々の一人用のタコ壺を掘って、身をすくめて眺めているだけ。あとで聞くと日本軍の暗号はすっかり敵に解読されていたとのことでした。

このような状況下で栄養失調の兵が多くなりましたが、重症で倒れるまで畑作業、元気な兵は塹壕作りの毎日。しかしながら畑作業でも、塹壕作りでも労働のキツイ部分は初年兵がまずやらされました。

東西四五^キ、南北一〇^キの島に、第二支隊一九〇〇人のほか、島民二二〇〇人、邦人七八〇人、他島に派遣のため一時寄港したままの、甲支隊兵が二〇〇〇人合わせて六八八〇人がいました。島民や邦人は自活の場所を与えられましたが、兵は極端な飢餓地獄と化し、夜間畑から甘藷を掘り、生のままかじったり、朝早くおきて椰子の実の落ちているのを探したり、トカゲを取って最初は焼いて食べていたが、後半は生のまま食べたりするありさま。その他シダ、ミューズなど食べられる草を探したりの毎日でした。

この当時の配給食は一日甘藷一個、あとは海水で煮た

甘藷の葉でしたから、生きんがための食べ物探し日課で、上官も見えて見ぬ振り。無数にいたトカゲも人影を見るとサツと逃げるようになり食べられなくなったところ、夜間非常食糧倉庫に立哨中の兵が、倉庫の下(床下一辺)にもぐって銃剣で穴を開けて米を盗むようになりました。初年兵同士は緊密な連絡で実行した次第。当時初年兵の仲間同士で「戦死なら諦めるが、餓死はいやだ。なんとか生きたい・・・」と話合ったものでした。

飢餓の島で生きるための地獄絵図の一つに、栄養失調症で死んだ戦友を夜間火葬する際、この使役の希望者が多いことがあります。それは火葬をする畑から甘藷を掘り、これを火葬の火で焼いて食べる役得があったからです。

平和の現在の常識では考えられないことですか、飢餓地獄のなせるところ、軍紀よりも食べるための戦いでもあったのです。

しかし、衰弱した胃袋に、雑食を生でつめ込んだために、下痢症状を起こし、一挙に栄養失調症となり、ニッパ椰子作りの野戦病院に收容されたのが、二十年七月で

した。病院といっても薬があるわけでもなく、食事が豊富なわけでもなく、ただ何もしないで寝ていられるのが、天国といえは天国でした。

同じ栄養失調症でも痩せ型と、浮腫型とがあり、小生は痩せ型で入隊当時、六八^キの体重が四〇^キとなり、足が上がらなくなったものです。浮腫型は小便が出なくなり、身体中が青くふくれてくるのです。こうなると寝ていても苦しがり、何かに寄りかかって寝るわけで、水も飲めない症状になると、腰から大きな注射針？で水を抜く治療を施していましたが、多くの人は一回で一升瓶で三、四本も採ったものでした。

朝目覚めると隣の病人が音もなく死んでいく日が多くなり、残っている者の話題は、あったかい味噌汁でご飯が食べたい、寿司を食べたい等々、故郷の食物の話ばかりでした。

このような島の軍隊生活でしたが、渡島後は後続の兵が来ないため、入営以来終戦まで初年兵の立場で、大変苦しい軍隊生活でした。

幻の残留勤務「ペテワン集積所」

茨城県 篠田市 郎

戦史をひもとくと、南方戦場に展開した第二方面軍（豊島房太郎中将）隷下の楓第三十二師団（石井嘉穂中将）は、赤道直下のハルマヘラ島において終戦を迎え、部隊行動による復員完結は、翌昭和二十一年六月十四日をもって完了し、以後は単独行動による復員と記されている。

私が所属した歩兵二百十一連隊（楓第四二五五部隊）のペテワン乗船が同年六月二日であり、この日突然、私を長とする師団残留勤務隊が編成された。連隊の田辺港上陸は六月十二日と記されているが、篠田隊は任務完了後の九月上旬、名古屋港に上陸した。その際、司令部直轄部隊の故をもって、復員日を司令部の復員日時とするとの指示通り記載したため、結果的には残留勤務はわずかに二日となり幻の残留勤務となってしまった。